

# 看護福祉学部

学校推薦型選抜(一般)  
小論文

**問題** 以下の文章は、医療・健康・介護のコラム「家族になった愛犬や愛猫、必ず訪れるペットロス・・・喪失感を癒やしてくれるのは？」の記事（ヨミドクター2024年4月10日・夏目誠・精神科医）から抜粋したものです。この文章を読んで問に答えなさい。

ドジャース・大谷翔平選手のインスタグラムの結婚報告では、「2人（1匹も）で力を合わせ支え合い」と、真美子夫人だけでなく、愛犬「デコピン」も家族の一員として紹介していました。このように犬や猫などのペットが家族の一員として愛される家庭が増えてきました。それだけにペットロスの喪失感も大きなものになります。しかし、45年の精神科産業医の経験で、ペットロスの喪失感で相談を受けた経験はあまりありません。それでも話題にはなります。この喪失感を埋めるのは？ ペットについて考えてみました。

なぜ、家族なのでしょう？ かつて犬を飼うと言えば、家の外の犬小屋がお決まりで、家の中で飼う小型犬を「座敷犬」と呼んでいました。今はどうでしょう。家族となった犬を家の外というのは考えにくいかもしれません。猫は今でも家の中と外を自由に行き来できるようにして飼うこともあります。うちの中で一緒に暮らす方も多いことでしょう。家族ですからね。

犬が飼い主にむけた視線はアタッチメント行動として飼い主のオキシトシンというホルモンの分泌を促進するとともに、犬にもそれが十分に分泌されているとの麻布大学の研究報告は注目を集めました。オキシトシンは「癒やしのホルモン」と言われています。脳の疲れを癒やし、気分を安定させ、人に対する信頼感が増し、心地よい幸福感をもたらす作用があることが知られているのです。

でも、いいことばかりではありません。ペットにも死は訪れます。別れは対象の喪失であり「ペットロス（Pet Loss）」と呼ばれているのはご存じの通りです。最強のストレスです。しかし精神科診療で相談を受けることはあまりありません。精神科産業医の私の場合は食堂や休憩室などで、何げない会話から相談になっていくことが多いです。

社員食堂で相席になった43歳、総務課長の高崎太郎さん（仮名）です。

高崎さん：産業医の先生ですね。

産業医：そうです。メンタル担当ですが。

高崎さん：少しお話ししてもいいですか。僕の愛犬が交通事故で死んだんですよ。ショックで……。

産業医：ショックでしょう。

高崎さん：姿や鳴き声が、浮かんでは消えて。

産業医　：癒やしてくれていたんだ。

高崎さん：そうでね。癒やされていました。毎日の散歩。休日は近所の公園を回りました。  
良い運動にもなりましたね。

産業医　：そうか。

高崎さん：思い出します。仕事のことでイライラした時、帰ると駆け寄って来て。思わず  
「聞いてくれ～、仕事がうまくいかないんだ」と話せば、クンクンしながら聞いてくれる。澄んだ悲しい目で。「僕が頑張っているのを認めてくれないんだ。わかってくれよ」とどなれば、悲しい目をして寄ってくる。思わず抱きしめてね。  
ぬくもりや拍動が伝わって来た。

産業医　：ワンちゃんが仲間、友達だったんですね。

高崎さん：今はもういない。家に帰ってもさみしいんですよ。

この時は、高崎さんの話を聞くのみでした。1時間くらいいたら、「先生、誰にも言えない気持ちを、聞いてくれてありがとう」と言われ別れました。少し悲しみが緩和されたように感じました。

働く人にとって、ペットが家族や友人であることも多いでしょう。話し相手になり、グチも言える。さらには交流でオキシトシンが増えて、癒やしになる。それだからこそペットロスの深い悲しみ。薬は必要ありませんが、話を聞いてあげるだけで、少しは楽になるようです。あとは時間ですね。

**問1** ペットロスの喪失感を癒やしてくれるのは何であると筆者は説明していますか、50字以内で述べなさい。

**問2** ペットと飼い主との関係で、どのようなことが人間に起こると述べられているか、述べなさい。さらにペットロスを体験している友人から相談を受けたとしたら、あなたはどのような点に注意して会話するか、500字以内で述べなさい。